

# 永井荷風『断腸亭日乗』管見

——昭和二十年夏、岡山の八十日——（補遺二）

寺 杣 雅 人

## 一「風光頗佳なり」——岡山市中散歩始まる

荷風一行（永井荷風、菅原明朗、永井智子）が岡山駅に降り立ったのは、昭和20年6月12日正午。3人はその翌日から岡山ホテルに宿泊することになるが、6月16日午後、「ホテルの食膳あまりに粗悪なれば」『断腸亭日乗』、以下適宜『断腸』と略す」との理由から旅館松月に宿替えをしている。

岡山ホテルと松月は、岡山駅からまっすぐ東（岡山城方面）に延びる大通り（現在は拡張されて「桃太郎大通り」と呼ばれる）の北側にあり、両者は指呼の距離にあった。次頁の地図上に岡山ホテルの位置を①、松月の位置を②として示している。（この図は、「最新詳密岡山市街地図」（昭和15年、部分）に荷風の岡山市中

散歩に関わる施設・建築物などと6月18日の散歩ルートを書き入れたもの。

荷風の岡山での市中散歩は、早くもその翌朝から始まっている。しかもこの日は夜になってまた近傍を歩いている。旅館松月は、岡山神社、後楽園、岡山城、旭川により近く、散歩好きの荷風には好適の宿であった。その6月17日の記事の全文を見てみよう。

六月十七日<sup>日曜</sup> 晴、午前岡山神社を拝し祠後の堤に出て岡山城を望見す、風光頗佳なり、歸り來りて一同と共に朝飯を喫す、夜旅館の室内蚊多く鬱蒸甚しければ出でゝ近巷を歩す、裁判所縣廳等あり、街路静にして堤防の方より螢の飛び來るを見る、郷愁禁じがたし、旅宿にかへり燈下に書を裁して凌霜五<sup>注</sup>叟の許に郵送す、



18日（月） 縣廳、裁判所、後樂園、蓬萊橋、

發着所（④）、峰巒<sup>ほうらん</sup>、溪流

19日（火） 沼尻温泉、旭川

20日（水） 京橋、中島町、娼樓、岡山城、後

樂園

21日（木） 京橋、色町、娼家、青樓、寺、淫

祠

22日（金） （「早朝警報あり」）（「此日終日讀

書」）

23日（土） 舊藩校（③）、縣立師範學校

24日（日） （菅原明朗夫妻明石へ）

25日（月） 西大寺町、（旭川）河畔、後樂園

26日（火） 城址、國民學校（⑤）<sup>（注4）</sup>

27日（水） （「住所變更の通知をなす」）

28日（木） （「この夜二時頃岡山の町襲撃せられ火一時に四方より起れり」）

「縣廳」と「裁判所」は、17日の記事にも18日の記事にも見えるが、いずれも旅館松月の近くにあった。道路を隔てた松月の北側に「裁判所」があり、その前の道を右に折れると左手に「縣廳」の建物が現れる（前頁の地図参照。現在は「裁判所」、「縣廳」とも移転している）。

## 二 荷風の岡山市中散歩を追う

17日はいきなり「午前岡山神社を拝し」と始まっていた岡山神社への道順は不明だが、翌18日の日記は、荷風の散歩ルートがよくわかる。この日荷風はどのように市中を歩き、何を見、何を感じたのかを見てみよう。まず18日の記事の全文である。

六月十八日、晴、菅原君夫婦朝の中より出で、在らず、獨晝飯<sup>ひるめし</sup>を喫して後昨朝散策せしあたりを歩む、縣廳裁判所などの立てる坂道を登り行くにおのづから後樂園外の橋に出づ、道の兩側に備前焼の陶器を並べたる店舗軒を連ねたり、されど店内人なく半ば戸を閉したり、橋を渡れば公園の入口なり、別に亦一小橋あり、蓬萊橋の名を掲ぐ、郊外西大寺に到る汽車の發着所あり、眼界豁然<sup>かつぜん</sup>、岡山市を圍める四方の峰巒<sup>ほうらん</sup>を望む、山の輪郭軟かにして險しからず、京都の丘陵を連想せしむ、溪流また往時の鴨川に似て稍大なり、河原に馬を洗ふものあり、網を投げ糸を垂るゝ者あり、ボートを泛るものあり、宛然<sup>ほ</sup>画中の光景人をして亂世の恐怖を忘れしむ、晡時客舎にかへる、（『斷腸』）

はじめに「菅原君夫婦朝の中より出でゝ在らず」とあるが、夫妻が宿にいないのは、岡山疎開の間3人が住むことの出来る「借家貸間」を探し回っていたからであろう。岡山ホテルにいた6月15日の記事中にも「菅原氏夫妻各知るべをたより借家貸間をさがせども見當らず、この夜も空しくホテルに宿す」とある。事情はその日と変わっていない。

さて、この日岡山市は好天で散歩日和であった。荷風は昼食を済ませた午後、宿を出ている。

まず、「縣廳裁判所などの立てる坂道を登り行く」とあり、松月を出て北に進んだ荷風は、岡山地方裁判所の前で右折、県庁（現在の県立美術館や天神山文化センターのあるところ）の南にある緩い傾斜の坂道を東の方に登っている。

すると、路面電車の通る道路に出る。当時存在したが、昭和43年に廃線となった番町線である。現在は、東山本線と清輝橋線の2路線だが、当時は3路線運行されていた。東山本線は、岡山駅前を出て城下で右折して南下するが、番町線は城下を北に向かう路線であった。

ちなみに、荷風と明朗は6月20日と21日の2日は、続けて中島町の遊郭を見物しているが、この両日の

日記には、いずれにも「電車にて」と書かれている。この時2人が乗ったのが東山本線（当時は旭東線）であり、おそらく宿に最寄りの城下電停から京橋に近い西大寺町電停まで乗ったのではないかと思われる。

「坂道を登り行くにおのづから後樂園外の橋に出づ」と荷風は書いているが、ここはかなり省筆されている。この坂道から橋まで行くには、前掲の地図を見ればわかるように、かなりの曲折を経なければならぬ。

県庁前の坂道からだともず番町線の路面電車の通る道路にぶつかる。この道路を横断すると旧津山往來に入るが、それを北に進むと現在の後樂園通りと交差する十字路に至る。そこを右に曲がると約80メートル先に見えるのが「後樂園外の橋」である。「おのづから」この橋に出られるわけではない。

「道の兩側に備前焼の陶器を並べたる店舗軒を連ねたり」と荷風は書いているが、菅原明朗は、『荷風罹災日乗註考』<sup>(注5)</sup>で、この部分について、「文章の綾で店は数軒、荷風はこの家に立寄った。今も当時のままである」と注している。なお、掲載されている写真を見ると、荷風が立ち寄った「この家」とい

うのは備前焼を商う平井本店で、昭和35年7月に再びここを訪れた明朗は「今も当時のままである」と付言している。この店は現在も写真と同じ扁額を入口に掲げ、鶴見橋西詰めと同じ場所で営業している。なお、この後、明朗は、すでに通り過ぎている県庁舎について、

日記には誌されていないが、「縣廳門前の坂道を登り行く」（明朗は『永井荷風日記』第7巻の荷風日記を使用しているので本文に相違がある——引用者注）時に荷風はこの建物に興味を引かれ、しばしばここで眺めた。

と付け加えている。岡山市中散歩をする荷風の様子が目に浮かぶ報告である。当時の県庁舎は「岡山における正式異人館の第一号」<sup>(注6)</sup>と言われているから、3月10日の東京大空襲で消失した偏奇館と重なるところがあつたのかも知れない。

「されど店内人なく半ば戸を閉したり」とあるが、戦時下の客の来ない陶器店は、店主の姿さえ見えない開店休業状態であつたのだろう。

「後樂園外の橋」とあるのは鶴見橋という名であるが、橋の名は記されていない。一方、後樂園の入り口から左に進むとまた橋があり、これは「別に亦

一小橋あり、蓬萊橋の名を掲ぐ」と「一小橋」ながら名を記している。

鶴見橋は、旭川の本流に架かる大橋であるが、ここでは2度とも「橋」として名は出さず、支流に架かる小橋は名を示している。このちぐはぐには何か訳があるのかもしれない。<sup>(注7)</sup>

「郊外西大寺に到る汽車の發着所あり」とあるが、これは西大寺鉄道（輕便鉄道）の後樂園駅（④）で、蓬萊橋を渡つたところにあつた。当時は、後樂園駅から西大寺市（現在の岡山市東区西大寺）の西大寺駅までの延長約12kmが運行されていた。現在は後樂園駅の跡地に夢二郷土美術館が出来ている。

「眼界豁然、<sup>かつぜん</sup>岡山市を圍める四方の峰巒<sup>ほうらん</sup>を望む」は、現在でもまったく同じで、蓬萊橋の上に出ると一気に視界が広がる。北方には、本陣山（443m）、金山（499m）、本宮高倉山（458m）、龍王山（312m）などの山があるが、いずれも低山で稜線はなだらかである。振り返ると、南東の方角には市民の里山として親しまれる操山<sup>みさお</sup>（169m）も近くに見える。どちらを向いても「山の輪郭軟かにして險しからず」を追体験することが可能である。

周りの山々から「京都の丘陵」を連想し、旭川の

流れを「往時の鴨川」に比しているが、これは往時京都に遊んだ体験から来るのだろう。旅行を好まない荷風であるが、「十年振」（大正11年）によれば、それまでに京都には4度遊んだとある。

だが一方、京都の鴨川に対して「稍大なり」と認識しながら、旭川を谷川を意味する「溪流」としているのはちよつと解せない。

昭和14年の改修工事で後楽園の東に支流ができた（おそらく水害から後楽園を守るためであつたのだろう）、後楽園は完全な中州となっている。その本流に架かるのが鶴見橋、新しく出来た支流に架かるのが蓬萊橋である。荷風は蓬萊橋の上にいるからこの細い支流を目にしているのかとも思われるが、それにしても溪流とは言わないだろうし、「稍大なり」との齟齬はさらに拡大することになる。

「河原に馬を洗ふものあり、網を投げ糸を垂るゝ者あり、ボートを泛るものあり、宛然画中の光景人をして亂世の恐怖を忘れしむ」と続く。確かに絵を見るような旭川のたたずまいである。荷風はここでも「風光頗佳なり」と記したいところであつただろう。

この旭川ののどかさに荷風は「人をして亂世の恐

怖を忘れしむ」としたためるのだが、もちろん荷風はこの時点で岡山大空襲を知らない。

そして10日後の6月28日の日記に荷風は、

この夜二時頃岡山の町襲撃せられ火一時に四方より起れり。警報のサイレンさへ鳴りひゞかず市民は睡眠中突然爆音をきいて逃げ出せしなり。余は旭川の堤を走り鐵橋に近き河原の砂上に伏して九死に一生を得たり。

と書き留めることとなる。「亂世の恐怖」を三たび体験することとなつたのである。

### 三 荷風日記の変容

——『斷腸亭日乗』から『罹災日録』へ

荷風日記の本文は、ここまで『斷腸亭日乗』原本に拠つてきた。

この原本が公表されたのは、荷風没後の昭和38（39）年で、岩波書店版『荷風全集』第19巻〜第24巻においてであつた。

しかし、岡山時代を含む昭和20年の部は、早く昭和21年3月〜6月の『新生』誌上に「罹災日録——昭和二十年の日記——」として発表されている。さ



らに翌昭和22年1月には扶桑書房から単行本『罹災日録（昭和廿年日記抄）』が公刊された。

荷風は「罹災日録」について、『斷腸亭日乗』原本の中から「昭和廿年ノ部ヲ抜摘セシモノナリ」『罹災日録』序文と述べているが、それはただ抜き出したものではない。『斷腸亭日乗』原本の本文がどのように変容しているか、前節で取り上げた昭和20年6月18日の記事を例として具体的に見てみよう。

まずそれぞれの全文を示す。異同の見える箇所には傍線を引き、①～⑭の番号を付している。なお、以下は『斷腸亭日乗』原本の本文をA、『新生』掲載の本文をB、単行本『罹災日録』の本文をCと適宜記号で呼称する。

#### A『斷腸亭日乗』原本

六月十八日、晴、<sup>①</sup>菅原君夫婦朝の中より出で、<sup>②</sup>在らず、<sup>③</sup>獨晝飯を喫して後昨朝<sup>④</sup>散策せしあたりを歩む、<sup>⑤</sup>縣廳裁判所などの立てる坂道を登り行くにおのづから<sup>⑥</sup>後樂園外の橋に出づ、<sup>⑦</sup>道の<sup>⑧</sup>兩側に備前焼の陶器を並べたる店舗軒を連ねたり、されど店内人なく半ば戸を閉したり、橋を渡れば公園の入口なり、別に亦一小橋あり、蓬萊橋の名を掲ぐ、<sup>⑨</sup>郊外西大寺に到る汽車の發着

所あり、眼界豁然、岡山市を圍める四方の峰巒を望む、<sup>⑩</sup>山の輪郭軟かにして險しからず、京都の丘陵を連想せしむ、溪流また往時の鴨川に似て稍大なり、河原に馬を洗ふものあり、網を投げ糸を垂るゝ者あり、<sup>⑪</sup>ボート<sup>⑫</sup>を泛るものあり、宛然<sup>⑬</sup>画中の光景人をして亂世の恐怖を忘れしむ、晡時客舎にかへる、

#### B『新生』誌掲載「罹災日録」

六月十八日 晴、<sup>①</sup>晝飯後昨朝<sup>②</sup>散步せしあたりを再び歩む、<sup>③</sup>縣廳門前の坂道を登り行くに道おのづから<sup>④</sup>後樂園郊岸の橋に出づ、<sup>⑤</sup>橋手前に備前焼の陶器を陳列せし店舗、道の南側に並びたれど、店内寂として人影なく、半ば戸を閉せしもあり。橋を渡れば公園の入口なり。別に亦一小橋あり。蓬萊橋の名を掲ぐ、<sup>⑥</sup>郊外西大寺に到る。汽車の發着所あり。眼界豁然。岡山市を圍める四方の峰巒を望む、<sup>⑦</sup>山姿優婉京都の丘陵を連想せしむ。溪流また往時の鴨川に似て形勢稍廣大なり。河原に馬を洗ふものあり。網を投げ糸を垂るゝものあり、<sup>⑧</sup>小舟<sup>⑨</sup>を泛るものあり。宛然<sup>⑩</sup>畫裏の光景人をして亂世の恐怖を忘れしむ。晡時客舎にかへる。

C 扶桑書房刊『罹災日録』

六月十八日 晴。晝飯後昨朝散歩せしあたりを  
 再び歩む。縣廳門前の坂道を登り行くに道お  
 のづから後樂園對岸の堤に出づ。橋手前に備前  
 燒の陶器を陳列せし店舗、道の兩側に並びたれ  
 ど、店内寂として人影なく、半ば戸を閉せしも  
 あり。橋を渡れば公園の入口なり。別に亦一小  
 橋あり。蓬萊橋の名を掲ぐ。郊外西大寺に到る  
 汽車の發着所あり。眼界豁然。岡山市を圍める  
 四方の峰巒を望む。山姿優婉京都の丘陵を連想  
 せしむ。溪流また往時の鴨川に似て形勢稍廣大  
 なり。河原に馬を洗ふものあり。網を投げ糸を  
 垂るゝものあり。小舟を泛るものあり。宛然畫  
 裏の光景人をして亂世の恐怖を忘れしむ。晡時  
 客舎にかへる。

まず驚くのは、修訂箇所が多さである。BもCも  
 単にAから「抜摘セシモノ」では明らかにない。  
 では、どのように修訂されているか、具体的に抜  
 き出して示すと次のようになる。

① A「菅原君夫婦朝の中より出でゝ在らず」↓な  
 し (B・Cに該当文なし)。

② A「獨晝飯を喫して後」↓B・C「晝飯後」

③ A「散策せしあたり」↓B・C「散歩せしあたり」  
 ④ A「歩む」↓B・C「再び歩む」  
 ⑤ A「縣廳裁判所などの立てる坂道」↓B・C「縣  
 廳門前の坂道」

⑥ A「おのづから」↓B・C「道おのづから」  
 ⑦ A「後樂園外の橋に」↓B「後樂園郊岸の橋に」  
 ↓C「後樂園對岸の堤に」

⑧ A「道の兩側に備前燒の陶器を並べたる店舗軒  
 を連ねたり、されど店内人なく半ば戸を閉した  
 り」↓B「橋手前に備前燒の陶器を陳列せし店  
 舗、道の南側に並びたれど、店内寂として人影  
 なく、半ば戸を閉せしもあり」↓C「橋手前に  
 備前燒の陶器を陳列せし店舗、道の兩側に並び  
 たれど、店内寂として人影なく、半ば戸を閉せ  
 しもあり」

⑨ A「郊外西大寺に到る汽車の發着所あり」↓B  
 「郊外西大寺に到る。汽車の發着所あり」↓A  
 「郊外西大寺に到る汽車の發着所あり」

⑩ A「山の輪郭軟かにして險しからず、京都の丘  
 陵を連想せしむ」↓B・C「山姿優婉京都の丘  
 陵を連想せしむ」

⑪ A「稍大なり」↓B・C「形勢稍廣大なり」



⑫ A「糸を垂るゝ者あり」↓B・C「糸を垂るゝものあり」

⑬ A「ボートを泛るものあり」↓B・C「小舟を泛るものあり」

⑭ A「画中の光景」↓B・C「畫裏の光景」

(句読点の異同は取り上げていない。句読点については、Aはすべて読点が打たれているが、B・Cでは適宜一部が句点に改められている。B・C間に句読点の異同はない。)

荷風は『新生』誌への掲載に際して『斷腸亭日乗』原本の本文を13箇所に渡り修訂している(⑨はBのみ2文から成るが、句点は誤って入ったものであろう。荷風の直しはなかったと考えられる。異同なしとして除外)。そしてそのほとんどが単行本『罹災日録』に引き継がれている。11箇所のA↓B・Cはそれを表している。

残る2箇所⑦⑧は、いずれもA↓B↓Cと変化しているが、実は⑧については、「道の南側」の「南」は、AもCも「兩」であるから誤植であろう。すると、これもA↓B・Cに入ることになる。

従って、結局A↓B・Cが12箇所、A↓B↓Cが1箇所となる。

A↓B↓Cは⑦の1箇所しかないが(Bの「対岸」は「對岸」を誤ったものだろう)、B↓Cの存在は、『罹災日録』で本文全体がさらに細かく吟味されている証左であろう。その結果、橋の前後の表現をめぐって言葉は二転三転、荷風は明らかに表現を模索している。

⑤も同様で、「裁判所」は「縣廳」と同じ坂にはないため除いたのであろう(前掲の地図参照)。

⑧は単語の入れ替えに止まらず、一文の構成をも変えてより適切な表現を求めたものと考えられる。

⑩⑪は、より漢文訓読調に改められている。それが荷風の求めた文学表現の方向であろう。

⑬では「ボート」が「小舟」になっているが、荷風が見た旭川の河面に浮かんでいたのは、一般には「ボート」と呼ばれるものであったと思われる。

当時明朗も智子を連れて岡山城を訪れているが、その時の出来事を次のように紹介している。

(智子が)ボートに乗ってみたいと云うので、舟着場へ降りて行ったら、戦時中故男女二人は乗せませんことわられた。(傍点引用者)

やはり現実存在するのは「ボート」と呼ばれる乗り物なのだが、「宛然畫裏の光景」とするには荷

風による「小舟」の一筆がどうしても必要だったの  
だろう。

⑭は「画中」をあえて使用頻度の低い「画裏」に  
変えている。荷風の世界の構築にはその方がより有  
効と判断されたのであろう。

やはり荷風日記一日にしてならず、と言わざるを  
えない。

## 注

(1) 凌霜は親交のあった相磯凌霜（本名相磯勝弥）、五  
叟は従弟の杵屋五叟（本名大島一雄）。

(2) 岡山城は当時国宝であったが、昭和20年の空襲で  
焼失。現在の岡山城は昭和41年に再建された。

(3) 「日和下駄」の第八「閑地」では、赤坂御所に隣接  
する空き地に歩み入った荷風。「夜になったたらきつ  
と蛩が飛ぶにちがいない」と確信している。

(4) 荷風は「國民學校」としているが、当時岡山城の  
城郭内に「工場の如く屹立」していた「宏大なる」  
学校は岡山県第一岡山中学校である。この学校も  
空襲で岡山城天守閣とともに焼失した。

(5) 菅原明朗『荷風罹災日乗註考』（平成12年9月、石  
井哀草果編、私家版）。明朗は昭和36年に執筆。

(6) 岡長平「ぼっこう横丁 おかやま風土記」〔夕刊新  
聞〕昭和36年1月13日

(7) ちなみに、『新生』誌掲載の「罹災日録」や単行本  
『罹災日録』の6月28日の記事は、空襲時の逃走  
経路について記しているが、鶴見橋は「旭橋」に  
変えられている。

旭橋に至るに對岸後樂園の林間に焰の上るを  
見しが、逃るべき道なきを以て橋をわたり西  
大寺町に通ずる田間の小徑を歩む

「鶴見橋」の名を記さない方法としては、ただ橋と  
のみ呼ぶか、別名を付けて切り抜けるかであろう。  
7月9日や8月18日の日記では、「國神社」を「三  
門神社」と改めているが、これは「國」を嫌った  
ためかと思われる。「鶴見」は「交尾（つる）み」  
との音通を嫌ったのであろうか。

(8) (5)に同じ。

―てらそま・まさと 尾道市立大学名誉教授―